

ひらけた道 住宅街（夕方）

美奈が歩いている。仕事帰り。

武の部屋へ向かっている。

しばらく歩き、角を曲がると、
嫌な雰囲気を感じる美奈。

瞬間、男が美奈のカバンを掴み、奪おうとする。

美奈 「え？ キヤツ！」

強盗 「う！」

美奈はしぶとく

カバンを奪われないように掴んでいる。

美奈 「ちょ、やめて！」

強盗 「この！」

美奈 「キヤツ！」

しばらく揉み合いになる2人。

足がもつれて、美奈は靴が脱げてしまう。

美奈 「だれか！ だれかー！」

美奈がカバンを奪い返そうと、

思いつきり力を入れて引っ張ると、
手が男のサングラスに当たつてしまう。

サングラスのグラスが1枚はがれ、
ポロリと地面に落ちる。

男の顔、目を見る美奈。

男は焦り、一気に力を込めて、カバンを奪い取る。

美奈は振り解かれ、

男はカバンを持って走り去る。

今頃になつて、美奈の声を聞きつけて集まる人々。

美奈は後を追いかけようと靴を履き

恐る恐る小走りで追いかける。

しばらく行くと、美奈のカバンの中身が
道にポツポツと落ちている。

それをひとつずつ拾いながら
トボトボ歩く美奈。

武の部屋（夜）

部屋の片付けをしている武。

コマゴマしたカバンの中身を抱えて、

美奈が帰つてくる。

玄関ドアを開けて室内に入つてくる。

武 「おかれりー」

美奈を見て、様子がおかしい事に気付く武。

美奈に歩み寄る。

武 「何? どうしたの?」

美奈 「武くん・・・」

美奈、両手に抱えていた荷物を無視して

武に抱きつく。

瞬間、ホツとして泣き出す美奈。

2人の足元に荷物がボトボト落ちる。

× × × (注・この間を実際に演じてみると)

武の回想　武の部屋　（夜）

カチヤン。武が玄関の鍵を閉める。

武　「大丈夫だよ。鍵も閉めたから」

美　奈　「うん」

美奈を抱きしめる武。

× × ×

武と美奈、横になつている。

武　「美奈・・・。寝れた？」

美奈、ぐつすり寝ている。

武　「美奈のそういうところ好きだよ」

寝ている美奈に向かつて話す武。

眠れずに考え事をする。

目を閉じる。

電話が鳴る。

しばらくして電話に出る武。

武 「はい。もしもし」

武の母 「武？」

武 「あ、ああ。うん。俺。どうしたの？」

武の母 「あのね。今、病院にいるんだけど」

武 「え？ 何で？ なんかあつたの？」

武の母泣き出す。

武 「どうしたの？」

武の母 「武、帰つてこれない？」

武からの目線で、途中になつたものの画をつなぐ。

入れかけの紅茶。

開いた本。

開け放しの窓。揺れるカーテン。など

		5
	交番 (昼)	
警察官	「道に落ちてたのは全部拾つて、持つて帰つたんですね？」	出掛ける美奈。見送る武。
美奈	「…」	出かける修。それを見送る踏太。
	美奈が引つたくり被害の届けに来ている。 扉に貼つてある地図に紛れて 覗き穴がある事を見つける美奈。	美奈に電話をかける香織。

美 奈 「はい。全部かは分からぬけど、

見当たるものは全部拾いました」

警察官 「じゃあ、カバンと財布と手帳・・・ですね？」

美 奈 「はい。・・・こういうのって、見つかるんでしようか？」

警察官 「付近の防犯カメラとかも全部チェックしますから。

大丈夫ですよ。」

ひらけた道 住宅街 (昼)

美奈が電話をしながら歩いている。

持つてているのは、少し前に

気に入つて使つていたカバン。

美 奈 「大丈夫ですって、前にお財布無くした時も

言われたけど、結局見つからなかつたもん。

あれつて、そう言わなきやいけないんだろうね。

そういうマニュアルとかあるんだよ、きっと

香 織 「そうかもね。見つからないですとは言えないもんね」

美奈辺りを見る。

美奈 「今、ちょうど現場に来ちやつたの。ひつたくりの」

香織 「え、そうなの？」

美奈 「うん。怖いな。そういうえば、用事なんだつけ？」

香織 「いや、だからね、明日さ」

美奈 「あれ？あ、ちょっと待つて！電池切れる！」

電話のバッテリーが切れる。
またかけなおすよ。ごめん！」

美奈 「ああ・・・」

もう一度辺りを見ながら歩く美奈。

武の部屋 （昼）

7

美奈が帰つてくる。

玄関ドアを開けて室内に入る。

美奈 「ただいまー」

武 「おかえり」

美奈が室内に入ると、

テーブルの上に、盗られた赤いカバンがある。

美 奈 「あれ？あれ？！これ！」

武 「うん」

美 奈 「どこで？」

武 「高架の脇の草のとこ」

美 奈 「探してくれたの？」

武 「うん」

美 奈 「ありがとう」

美奈カバンの中を見る。財布はないが、

手帳は入つてる。

武 「財布はなかつた」

美 奈 「うん。いい。手帳戻ってきたんだから。

本当にありがとう」

武 「うん。良かった」

美 奈 「中見た？」

武 「見てないよ。大事なものでしょ」

美 奈 「うん。アイデア帳」

武 「短歌の?」

美 奈 「うん」

美奈、手帳をカバンにしまい、

武に抱きつく。

美 奈 「武くん」

武 「ん?」

美 奈 「ありがとう」

武 「うん」

美 奈 「モヤモヤがすつきりした」

武 「そつか」

美奈、大きなカバンが荷造りされている事に気付く。

美 奈 「あれなに?どこか行くの?」

武 「うん」

× × ×

武、部屋の中を右往左往して、

忘れ物等ないか、チエツクしている。

その後をくつついで右往左往する美奈。

美奈「武くん、やつぱり見送りたいよ」

「会社寄らないと行けないって言つてたでしよう」

美奈一でもー・・・

武
一
・
・
・
あ、
そ
う
だ

台所に行き、ガスの元栓を閉める武

それを見つめる美奈。

しばらく帰つてこない事を悟る。

武の家の前 (昼)

8

大きな力バンを持つて、武が出てくる。

美奈も武の小さなカバンを持つて出てくる。

「とりあえず、着いたら連絡するし」

美奈「うん」

武、美奈が持っていたカバンを取り、歩きだす。

美奈、見えなくなるまで武を見送る。

武も、随分行つた後、振り返り、手を振る。

それに応えて、手を振る美奈。

武が見えなくなり、手を下ろす。

歩き出す。

9

美奈の会社 オフィス内 (夕方)

前シーンから連続するように歩いている美奈、
オフィスに入つてくる。自分の席に着く。

美 奈 「4年間開いたままのガス栓を閉めた

しばらく帰らないんだ」

(回想) 美奈からの視点。武がガス栓を閉めた場面。

去つていく武の後ろ姿。

武に応えて、振る自分の手。手を下ろす。

連続するように現在の美奈の手に戻る。

美奈はピアノのように、机の上で指を動かして
文字数を数える。

10

武の実家 玄関 (夜)

武が荷物を持って、実家に帰つてくる。

母・恵子が出迎える。

武 「ただいま」

恵子「ああ。お帰り。ありがとうございます。心強いわ」

武 「うん」

恵子「仕事大丈夫だった？」

武 「うん。大丈夫」

恵子「そう。良かった」

武 「・・・とりあえず荷物置いてくる」

恵子「夜ご飯食べてないでしょ？」

武 「うん」

恵子「じゃあ、準備するね」

武は自分の部屋へ行き、恵子は台所に行く。

11 武の実家 武の部屋 (夜)

武、荷物を置き、ゴロンとなりながら
携帯電話をかける。美奈へ。

12 美奈の部屋の近くの道 (夜)

美奈、帰宅途中。歩いている。

時計を見る。武はもう着いたのかなと
考えながら、携帯電話を取り出す。

バッテリーが切れていた事に気付く。
美 奈 「あ、しまつた・・・」

13 武の実家 武の部屋 (夜)

美奈の部屋 室内（夜）

部屋に入つてくるなり、

携帯電話に充電器のプラグを差し込む美奈。
電話の電源を入れて一息つく。

カバンから手帳を取り出し本棚に納める。
同じような手帳が並んでいる。

直後、電話が鳴る。美奈あわてて電話に出る。

美奈「はいもしもし。」

香織「あ、もしもし？つながった」

美奈「あ、香織。ごめん。今部屋戻ってきたんだ」

香織「そつか。お疲れさま」

美奈「お疲れさま。あ、何だつけ？・・・」

香織「ほら。舞子の一回忌」

武、携帯電話をいろいろな方向に向けては
画面を見たり、耳に当たりする。電波が届かない。

美奈「あ」

カレンダーを見る美奈。日にちにしるしがしてある。
(カレンダー日付や年のないものがあれば)

15 駅近くのバスロータリー (昼)

ベンチに、喪服姿の美奈、香織、修が座っている。

(前から)

しばらくすると、向こうから、陽一がやってくる。

陽一に気付く3人。

遠くから頭を下げる陽一。

それに応えて、頭を下げる3人。

16 靈園 舞子のお墓の前 (昼)

喪服姿の美奈、香織、修、陽一がいる。

手を合わせている。陽一以外の3人泣いている。

靈園近くの道（昼）

美奈、香織、修、陽一が立っている。

修 「どうしようつか。どつか入ろうか」

美奈 「うん。久しぶりだから話したい」

陽一 「いや。ごめん、今日はもう。

これから仕事に戻らなきやいけなくて」

美奈 「えー。そつかあ」

陽一 「ごめん」

美奈 「うん。いいよ。大丈夫」

修 「じゃあ、また近いうちに集まろうよ」

美奈 「そうだね」

陽一 「うん。・・・木佐木。皆に連絡回してくれたり、

いろいろありがとう」

香織 「うん」

美奈 「来れて良かったよ」

駅近くのバスロータリー（昼）

ありがとう、という風にうなずく陽一。

別れ際に手を振ったきり、

一度も振り向かずに遠くに去っていく陽一。

ベンチに、喪服姿の美奈、香織、修が座っている。

（後ろから）

美奈「瘦せてたね」

修「うん」

美奈「香織、陽一君とこまめに連絡取つてるの？」

香織「こまめにって程じやないけど。

たまに近況聞いたりはしてたよ」

美奈「そつか」

香織「仕事忙しいみたい」

美奈「そつか」

修「忙しくしてるんだろ」

修の部屋　（夜）

踏太が夕飯の準備をしている。修が帰つてくる。

修
「ただいま」

踏太
「おかえりー。結構時間かかんだね」

修
「うん」

踏太
「お塩とかいるの？」

修
「ううん。大丈夫」

踏太
「そつか」

踏太、調理に戻る。

修、踏太に近付き、後ろから、軽く体を寄せる。

踏太
「今日はね。シチューだよ」

修
「うまそう」

踏太
「たぶんね」

修
「着替えてくる」

踏太
「うん」

修部屋に向かう

× × ×

楽な格好に着替え終わった修。

テーブルにはご飯に盛られたシチュー。

「シチューご飯にかけて食べるの？」

踏 太 「え？ そうだけど」

修 「そっか」

踏太、支度を終えてテーブルの所に来る。

踏 太 「え？ なんで？ 変？」

修 「変じやないよ」

踏 太 「違う食べ方あるの？」

修 「いや」

踏 太 「なに？」

修 「パンとか」

踏 太 「ああ。パンか。パンないや」

修 「いいよこれで」

踏 太 「本当?」

修 「本当。これが良い。食べよ」

踏 太 「うん。いただきます」

修 「いただきます」

2人手を合わせて食べ始める。

踏 太 「今日。どうだつた?」

修 「うん。まあ。やっぱり1年経つても辛いね」

踏 太 「そつか」

修 「1年経つてるからね。自分で、1年経つてるから

大丈夫だと思つてたんだ。

行く直前もそう思つてたんだけどね。

お墓の前行つて、手を合わせて、

いろいろ思い出しちやうと、駄目だね」

踏 太 「そつか。・・・何人くらい来たの?」

修 「僕と、その亡くなつた舞子の旦那さん含めて4人」

踏 太 「少ないね」

真作がくつろいで、一杯やっている。

修 「一応、クラスの連中とか、会社の人とか連絡したみたいだけど。」

結局仲良かつたメンツだけ集まつたな」

踏 太 「そつかあ」

修 「事情があつて、骨はそのお墓にないんだけどね」

踏 太 「え？ そうなの？」

修 「うん。だけど集まれて良かつたつてみんなで話して」

踏 太 「そつか」

修 「来年の三回忌も必ず来るつてお墓の前で約束したんだ」

踏 太 「え、二回忌じやないの？」

修 「2年目は三回忌つていうんだよ」

踏 太 「え？ あ、そうなんだ」

修 「ははは（笑）かわいいな」

香織、楽な格好に着替え、お茶漬けの準備。

お湯を注ぐ。

真作「何？ご飯食べてこなかつたんだ？」

香織「うん」

香織、お茶漬けをテーブルに置き、手を合わせる。

香織「いただきます」

真作「あ、お母さんがつけた漬け物あつたな。出すよ」

香織「ありがとうございます」

真作、立ち上がり冷蔵庫から

漬け物入りのタッパを出す。

フタを開けて、香織の前に置く。

香織「ありがとうございます」

と言つて、もう一度手を合わせてから、

お茶漬けを軽くする。ホッと一息ついて、

漬け物食べる。

香織「お母さん、お漬け物つけるの、お上手ね」

真作「嫌味？」

香織「本当の事言つただけ」

真作、バツが悪そうに、焼酎ロックを一口飲む。

真作「せつかく出掛けたんだから、

何か食べたら良かつたのに」

香織「いいの。今日みたいな日は、これで十分」

真作「でも、みんな久しぶりだつたんだろ?」

香織「うん。一年振り。・・・お葬式の時以来」

真作「そつか」

香織「舞子亡くなつて、それぞれ疎遠になつてたから。

相原君の事も。

みんなどう接したらいいのか分からなくてね」

真作「相原さん・・・。どうだつたの?」

香織「うん。・・・まあちよつと瘦せてたけど。

しつかりしてたよ」

真作「そう。俺、本当に氣の毒で。

お葬式の時も見てられなかつたなあ」

香織「うん」

21

陽一の部屋（夜）

陽一、帰宅する。

生活感のない、シンプルな部屋。

舞子の写真が飾つてある。その前に水とお花が供えてある。写真の前に来る陽一。

陽一「・・・」

舞子の写真を見つめる。ネクタイをゆるめ、ソファ

に横になる。

少し横になつた後、机に向かい、仕事を始める。

22

武の部屋（夜）

喪服姿の美奈が帰つてくる。

美奈「ふう・・・」

携帯電話を取り出し、武にかける。

が、電波が届かないという案内が流れる。

それを聞きながら、ベッドに倒れる美奈。

美奈「圈外だよ・・・。届かないよ・・・」

美奈、ゴロリと丸くなる。

美奈「寂しい・・・」

そう言いながら、メールなら届くだろうと、打ち始める。

最初の変換「寂しい」。そのメール画面を見て、少しごろごろした後、手で文字数を数えながら打ち加える。

美奈「寂しいと思う気持ちでいっぱいの

この空間にはいないあなた」

しばらくメール画面を見ながらごろごろした後、保存ボタンを押す。

美奈「保存」

武の父・民雄と母・恵子が病室内にいる。

武が室内に入つてくる。

民雄「武。来てくれたのか」

武「うん」

民雄「そんな、わざわざ来てくれなくていいのに」

武「今、先生に話し聞いてきた」

民雄「そうか。お前仕事は？大丈夫なのか？」

武「大丈夫」

民雄「戻つてきてる暇ないだろ。お店一番忙しい時期だろ」

武「・・・」

民雄「わしは大丈夫だから」

武「いや、手術が終わるまではいる」

民雄「だから心配ないって」

武「心配だよ。本当に。だからいるから」

民雄「・・・」

美奈、仕事中。同僚が話しをしている。

大橋「はあ。もう・・・」

大橋、軽い頭痛。腰の痛み。

桜井「ん?」

大橋「お客さん來てるの」

桜井「お客さん?あ、生理ですか」

大橋「もう」

桜井「あ、すみません。結構重いんですか?」

大橋「結構ね」

桜井「大橋さん、ちょっとコーヒー飲み過ぎですよ」

大橋「そう?」

桜井「ちょっと待つてくださいねー」

と言って、カバンからゴソゴソ取り出す。

桜井「これ、はい」

ルイボスティーの袋を大橋に渡す。

大橋「ルイボスティー？」

桜井「うちのお母さんにすすめられたんですけど、結構良くて。
軽くなりましたよ。これのおかげか分かんないですけど。

あげます」

大橋「あ、ありがとうございます」

ふーんという感じで袋を見る大橋。

桜井「うちのお母さんは更年期で。

毎日、超イライラしてますよ」

大橋「更年期かー」

桜井「女って損ですよねー」。

いつだつてホルモンに振り回されますよね」

大橋「そうねー」

会話をなんとなく聞いている美奈。

カバンから、肩をマッサージする棒を取り出し、

肩甲骨周りを揉む美奈。

そこへ結衣がお茶を持ってやってくる。

美奈のデスクに置く。

結 衣 「お疲れさまです」

美 奈 「あ、お疲れさま。あの、気を使ってくれなくて
 大丈夫だからね」

結 衣 「はい！・・・ちょっと失礼しまーす」

 と言いながら、美奈の肩甲骨周りを指圧し始める。

美 奈 「え、あ！いつつ・・・。何？」

結 衣 「どうですか？」

美 奈 「え？あ、気持ちいいけど」

結 衣 「私、指圧の学校行つてた事あるんです」

美 奈 「そう・・・あ、あの、もう大丈夫だから」

結 衣 「でもコリが・・・」

美 奈 「いつつ・・・」

結 衣 「こここの、コリコリ」

美 奈 「いや。うん。も、もう大丈夫！」

結 衣 「でもコリ・・・」

美 奈 「ちょっと頭痛くなつてきちゃつたから」

結 衣 「あ、すみません」

桜井と大橋、見ている。

美奈 「うん・・・。はあ。あの。私のチーム来たからって
別に特別な事してくれなくていいんだからね」

結衣 「あ、はい。すみません」

と自分のデスクに戻る結衣。

結衣 「あの、私、里中さんのチームに来れて嬉しいです。
里中さんみたいにバリバリ仕事したいんです」

美奈 「あ、・・・そう」

結衣 「はい！」

美奈 「・・・」

内心、若いつていいなあという気持ち。

踏太、夕飯の準備をしている。

(皿を出していたり等)

そこへフラフラと修がやってくる。

修の部屋（夜）

修 瓶に500円玉を入れる。つもり貯金。
 「出かけたつもり。今日結局出かけなかつたし」

踏 太 「ふーん」

修 「踏太とどつか旅行行きたいな」

踏 太 「ふーん」

修 「いつになるやら」

修 「あ、めまいが・・・」

と言つて、フラリとなり、踏太に抱きつく。

踏 太 「あ、もう」

修 「ふー。あぶなかつた」

と言って、離れるが

修 「まためまい・・・」

と言って、踏太に抱きつく。

踏 太 「もう」

踏 太 「・・・」

修の部屋 （夜（7時ちょうどくらい））

夕飯食べている修と踏太。

（メニュー何が良いかな。トンテキ？）

修、考え方をしながら肉を切っている。

皿とナイフがこする音。

踏 太 「う！」

修 「？」

踏 太 「その音苦手・・・」

修 「あ、ごめん」

と言つて、すでに切れている肉を口へ。もぐもぐ。

踏 太 「どうしたの？」

修 「ん？あ、ちょっと考え方」

踏 太 「なに？」

修 「え？ああ。こないだの、一回忌のね」

踏 太 「うん」

修 「改めて、集まりたいねって話になつたから。どういう風にすれば良いかなってさ」

踏 太 「なるほど。うーん」

28
修の部屋 家の前 (夜)

陽一、修の家の前で時間を潰している。
たまに、修の部屋の窓を見上げる。
そこへ美奈と香織が来る。

29
修の部屋 玄関 (夜)

ピンポーン。呼び鈴が鳴る。
修、扉を開ける。

修 「はい」

美 奈 「来たよ。おじやましまーす」

		30
修	「うん。皆一緒に来たの？」	
美奈	「うんそうだよー」	
香織	「おじやまします」	
修	「うん」	
陽一	「おじやまします」	
修	「うん」	
	室内に入る。	
修の部屋 ダイニング (夜)		
修	「あ」	
修	「あ」	
	といって、踏太のところに行く。	

ダイニングテーブルにたくさん料理。

キッチンに向かって、準備をしている踏太。
 (紹介されるまでわざと熱中してるように
 キッチンに向かっている)

修 「あ」
 修 「あ」
 修 「あ」
 修 「あ」

踏 太 「はじめまして。こんばんわ」

美 奈 「あー。踏太くん。はじめまして。

突然おしかけてごめんさないね」

踏 太 「いえ、僕も居候の身なんで。おじゃまします」

修 「・・・これ、踏太が作ったんだよ」

美 奈 「わー。すごい」

香 織 「踏太くんお料理上手だね」

皆、料理を見る。

× × ×

皆、食事を楽しんでいる。

陽 一 「こういう風に、食事するの久しぶりだな」

修 「そう」

陽 一 「一回忌にも集まってくれて。こういう風に集まれて。

ありがたいよ」

陽 一 「良かつた」

香織はあまり食べていない。

踏太 「あ、あの。お口に合いませんでしたか？」

香織 「いえ。おいしいですよ」

美奈 「あんまり食べてないよね。食欲ないの？」

香織 「うん。まあ」

美奈 「何、体調悪いの？」

香織 「ううん」

美奈 「？」

踏太 「・・・赤ちゃん？」

香織 「え？あ。・・・うん」

美奈 「えー本当に？！すごい！良かつたね」

香織 「うん」

陽一 「おめでとう」

香織 「ありがとう」

踏太に向かつて

香織 「何で分かったの？」

踏太 「何となくだよ」

美奈 「いいなあ。赤ちゃんかあ」

踏太 「美奈さんご結婚は?」

美奈 「まだだけど。もうすぐ」

修 「へー」

美奈 「したい」

何それと言つた感じで、みんな軽く笑う。

修、チラリ踏太を見る。

(結婚、家族という話題を受けて)

踏太も修を見る。修、笑いかける。

香織 「美奈、結婚願望なかつたんじやないの?」

美奈 「前はね。でも最近は急に」

香織 「ふーん」

陽一、唇を尖らせたり、噛んだりしている。

それを見て

修 「どうしたの?」

陽一 「え」

修 「口」

陽 一 「ああ。エビが」

× × ×

踏太、座つたまま

コクリコクリと眠りに入りかけている。

修は、しばらく前から、

踏太が眠そうにしていた事に気付いていた。

修 「ごめん。そろそろ」

と小声で皆に伝える。

踏太を見て、皆、静かに頷く。

修 「踏太、朝早いから」

美 奈 「仕事？」

修 「新聞の配達」

美 奈 「なんだ？」

陽一、美奈、香織、

修の家の前の道 (夜)

陽一、美奈、香織帰る。

見送る修。陽一唇を舐めている。

修
「まだ痒い?」

陽一「いや。大丈夫。いつもなるから」

美奈「うちの弟もエビ好きなのに、いつも口が痒いってさー」

靴を履き終え、玄関先に出る。

陽一「久しぶりで。楽しくて。長居しちゃって悪かった」

修
「ううん。良かつた。また」

陽一「うん。踏太くんにもよろしく言っておいて」

修
「うん」

じゃあ、といった感じで

陽一、美奈、香織、頭を下げる。

マンションの入り口から出てくる。

香織 「じゃ、私、メトロ使うから」

美奈 「あ、うん」

陽一 「木佐木。おめでとう」

香織 「あ、ありがとう」

陽一 「うん」

美奈 「・・・おめでとう」

香織 「ありがとう。じゃ。また」

と言って、駅の方向に歩く香織。

それを見送る陽一。

美奈には、陽一の見送つている表情が寂しそうに感じる。

33
駅までの道（夜）

陽一と美奈、歩いている。

陽一 「武と、最近どうなの？」

美奈「うん。今、武くんのお父さんが倒れちゃったみたいで、
実家に帰ってる」

陽一「ああ。そう」

美奈「なんか、病気の事だし、詳しいこと聞けないからさあ。
いつ帰つてくるか分からんのだあ」

陽一「そつか」

美奈「あと、電波届かないし」

陽一少し笑う。

美奈「私、もうすぐ30だよ・・・」

陽一「あ、そうだね」

美奈「それでなんか将来の事考えると、

急に不安になつてきちゃつてさ」「

陽一「不安つて？」

美奈「武くんと付き合つて、もう5年になるから。
これからどうなるのかなーとか。

武くん、実家に帰りたいって前から言つてるし」

陽一「うん」

美 奈 「そうなると、私どうなるんだろうって。
仕事辞めて一緒に行くのかな、とか。
でも、そんな話、全然してなくてさ。

なんか落ち込んじゃうんだあ」

陽 一 「そっか」

美 奈 「だいたい3年過ぎても結婚の話が出てこないと
駄目になるとか言わない？」

陽 一 「なんかあるね」

美 奈 「あ、でも陽一くんと舞子は結婚まで7年だったね」

陽 一 「うん」

美 奈 「あ、ごめん」

陽 一 「ううん」

しばらく歩く。

陽 一 「武とちやんと話せばいいんだよ」

美 奈 「うん・・・」

陽 一 「好き、ありがとう、ごめんね

ちやんと今、言つとかないと。

いつでも言えると思つてたら後悔するよ」

34 修の部屋 (夜)

踏太、ベッドで熟睡している。

(踏太がどうやつてベッドまで行つたのか、
修と踏太で要確認)

修、寝室に入つてくる。

パタン扉閉まる。

ベッドに入り、後ろから、ギュッと
踏太を抱きしめる。

35 香織の家 リビング (夜)

酒を飲んでいる真作。香織が帰つてくる。

(こここの真作がしている行動、

たたずまいは真作と意見を出して作りたい)

香織 「ただいまー」

真作 「あ、おかえり。楽しかった?」

香織 「うん。なんか久しぶりにいっぱいおしゃべりしてきた」

真作 「そつか。良かつた」

香織 「ありがとう。何食べたの?」

真作 「手巻きしたよ」

香織 「そう」

香織、お茶を入れる準備をする。

(ここも香織と相談)

テーブルの上の紙を見つける香織。
手に取る。男の子の名前と
女の子の名前が書かれている

香織 「なに?」

真作 「あ、ああ。父さんと母さんの、

希望

つていうか。・・・赤ちゃんの名前」

香織 「もう。言っちゃったの?」

真 作 「え」

香織 「落ち着くまで言わないでいようって言つたじやん」
真 作 「ごめん。心音。確認出来たって言つてたから。
もういいのかと思つて・・・」

香織 「・・・」

香織 「うん。いいよ」
真 作 「ごめん」

真作表情ゆるめて香織のそばに寄る。

真 作 「すごい喜んでくれたよ」

香織 「そう？」

真 作 「うん。男の子か女の子か分かつたら

早く教えなさいって。

いろいろ準備しなきやいけないんだからって」

香織 「そつか」

と微笑む。真作は香織に体を寄せていく。

恐る恐る聞く感じで、

真 作 「まさ、下で一緒に飯食べたり、しょ？」

香織名前の書かれた紙を見つめている。

真作 「・・・無理？」

香織、明るい口調で、

香織 「考え方とく」

真作 嬉しくて、香織の体に顔をうずめる。

（匂いをかぐ感じ）

紙を持つ香織の手。手がテーブルに下がり、
下腹部の寄りになる。

36

修の部屋 （朝）

朝ご飯途中の踏太。うつらうつらしてる。

修は洗い物中。ピンポンと呼び鈴が鳴る。

踏太は寝てしまつていてる。修が出る。

修 「はいー」

玄関ドアを開けると、母・奈津子が立つていてる。

修 「え？どうしたの」

奈津子「来ちゃった」

修「来ちゃつたじやないよ。どうしたの？」

奈津子「えー。久しぶりに遊びにきただけよ」

修「なんで連絡しないの。また姉さんと喧嘩したの？」

奈津子「おじやましまーす」

とズカズカ入る。修、慌てて

修「ちょ、ちよつと待つてよ。いきなり」

奈津子「おじやましまーす」

と奈津子が室内に入ると、

踏太がムクリと顔を上げて目覚める。

踏太「?こんなにちわ」

奈津子「こんなにちわ」

× × ×

ベッドに仰向けになつて寝ている奈津子。

時折腰をさすってつぶやく。

奈津子「いつつ・・・」

遠くの景色を見ながら話す。

少し寒い。

修 「ごめんな」

踏 太 「なんで謝るの？」

修 「いや。・・・氣使わせちゃって」

踏 太 「彼氏の親って初めて見た」

修 「そつか」

踏 太 「・・・」

修 「・・・なんか夜行バスで来たみたいで。腰痛いって」

笑う踏太。

踏 太 「今日は、僕いいから。お母さんと出掛けなよ」

修 「いいの？」

踏 太 「いいよ」

修 「ごめん」

修の家 リビング (昼)

踏太と修並んで立っている。

修
「母さん」

奈津子 「なに・・・」

とチラリ、2人を見る。

修
「こちら、林馬踏太くん。一緒に住んでる」

踏太 「はじめまして」

踏太 「親孝行してあげなよ」
「うん」

修
「思ってないよ」

踏太 「僕の事、変に思つたかな?」
「全然」

修
「ふーん」

修
「紹介するよ」

と頭を下げる。

奈津子 「あ、あらあ。ああ、そう。息子がお世話になつてます」
と言いながら、体勢を整えてベッドの上で
おじぎするが、瞬間、腰が痛くなる。

奈津子 「いたたた」

踏太吹き出して、笑つてしまふ。

修にこづかれる。修、大丈夫か?といいながら

奈津子に近寄る。若くないのに、

夜行バスとか無理するからだよとか
湿布だす?とか、なんとか言つている。

その様子を見ている踏太。

踏太には親がいないので、複雑な心中。

しゃべりながら、駅方面に歩く2人。

それを窓から見ている踏太。

40 修の家 リビング (夕方)

携帯電話でゲームをしている。
ツイッター見てる。

41 ベッド (夕方)

ベッドに寝転がりながら
携帯電話をいじっている。

(どちらの場面も行動は、踏太と相談して決めたい)

42 都心の街 (夜)

踏太が歩いてる。

(いろんな場所を歩いていたり、
立ち止まっていたり。
いくつものカットを合わせて、
さまざまっている感じにしたい)

都心の街 道端のベンチ (夜)

踏太、電話で友達と話している。
道端のベンチに座っている。

踏太 「今日さ、彼氏のお母さん来ちゃってさ」

踏太 「え? マジで」

踏太 「そうそう」

踏太 「会ったの?」

踏太 「会つたよ。紹介してもらつた」

樹 「へー。そつか。嬉しいね」

踏太 「まあね。でき。まあ氣使うし、

親子水入らずって事で、今日帰らないんだけどさ」

友樹「うん」
太「友樹ん家に泊めてくれない?」
樹「えー。・・・ごめん。無理」

(ここから)

踏太「なんで?」
友樹「え。あ。今日さ、彼氏泊まりにくる」
踏太「え? 出来たの?」
友樹「うん」
踏太「言つてよー」
樹「いや、まだはじまつたばつかでさ」
踏太「マジかあ」
樹「うん。悪い」
踏太「まあじや仕方ないね。今度会わせて」
踏友樹「それまで續けばいいけどね」
踏太「あっあー。ま、じやあ」
友樹「あ、他にアテあるの?」
太「うーん。どうだろ」

修の家の前の道（夜）

修と、母・奈津子帰つてくる。
修は部屋の窓を見上げる。
電気が点いていないので、
踏太が不在だと知る。

と電話を切り、どうしようかなーとうつむき、
携帯をいじくりながら悩む。

友樹「寮は？寮いけば？」
踏太「寮、自分の部屋ないし。あそこ戻りたくない」
友樹「そつかー。力になれずっとめん」
踏太「大丈夫。ありがと」
友樹「寂しくなつても変なとこ行かないように」
踏太「いかねーよ」
友樹「じゃあ」
踏太「じゃ」

繁華街から少し外れた路地 （夜）

踏太、路肩にしゃがんでいる。

そこに細路がやつてくる。

何度か行つたり来たりする。

踏太をチラチラ見ている。

踏太も細路をチラリ見る。

踏太の隣にやつてきて、ジツと踏太を見る細路。

踏太も細路を見る。

そこに、那之助（やすのすけ）と秋司（しゅうじ）

が通りかかる。

那乃助「あれ、踏太くん？」

那之助の側に向き直る踏太。

踏太「那乃助さん」

と顔を上げて那乃助を見た後、

秋司を見て頭を下げる。秋司も頭を下げる。

飲み屋
(夜)

踏太、那乃助、秋司が
バーのカウンターに座っている。

那乃助 「久しぶり。じゃ、カンパーカイ」

と言って乾杯。那乃助、ビールを一気に飲み干す。

トンとカウンターに置くと

マスターも分かつていたようで、

すぐさま2杯目のビールを出してくる。

それもまた一気に飲み干す。

秋 司 「いい加減それやめなよ・・・」

踏太笑う。

那乃助 「ふう」

と言つて飲み干し、トンとグラスを置く。
すかさず、レモンチューハイが出てくる。
それには手をつけない。

那乃助 「彼氏出来たんだろう？」

踏 太 「うん」

那乃助 「彼氏出来るといつともパタツと連絡なくなるよな」

踏 太 「・・・」

秋 司 「今日は？」

踏 太 「ちよっと」

秋 司 「そう」

踏 太 「那乃助さん達は？」

秋 司 「買い物帰り」

踏 太 「ふーん」

那乃助 「いつ出来たの？」

踏 太 「花見のちよっと後」

那乃助 「ふーん。じや付き合って半年くらい？」

踏 太 「うん」

那乃助 「順調なの？」

踏 太 「うーん。まあ」

那乃助 「ふふふ（笑い）。まあ。半年くらいとか

いろいろ出てくるよな

踏 太 「2人、もう長いよね」

那乃助 「俺ら?」

秋 司 「7年だね」

那乃助 「そうだな」

踏 太 「ケンカとかする?」

那乃助 「そりやしょっちゅう」

踏 太 「でも別れないんだ?」

那乃助 「うん。まあな。好きだからな。

それでなんとかやつてきたよな

秋 司 「うなづく」

踏 太 「ふーん」

那乃助 「そつちは?一緒に住んでるんだろ?」

踏 太 「うん」

那乃助 「やどかり踏太だもんな」

踏 太 「違うよ」

秋 司 「今日は帰らないの?」

踏 太「うん」

那乃助「けんかしたのか？」

踏 太「違うよ」

那乃助「じゃあ何フラフラしてんの。彼氏待ってるぞ」

踏 太「・・・」

那乃助「なんだよ。珍しいな。なんかあつたの？」

踏 太「・・・なんか虚しいんだ」

那乃助「なんで？」

踏 太「だつてさ。僕ら虚しいじやん。

なんで付き合つたり一緒にいるの。

どうせ家族になれる訳じやないじやん

那乃助「家族になれないのか？」

踏 太「そうだよ。結婚出来る訳でもないし。

赤ちゃん出来る訳でもないし」

那乃助「そんなん無くとも、

俺らもう家族みたいになつてるけど。な」

秋 司「うん」

踏太 「そつか。だよね。僕の問題だよね。

寂しい時とか。今寂しいから、

誰でもいいかなって思っちゃう事あるしさ」

秋司 「・・・」

那乃助 「あ、おい。またバイの人なの？」

踏太 「なんで？」

那乃助 「前付き合つてた人、バイの人で

結婚するからつて捨てられたつて言ってたじやん」

踏太 「ああ。違うよ。バイの人じやないし。たぶん」

那乃助 「まあ。俺も結構お前の歳の頃悩んでたけど。

結婚とかなんとかつてどうでもいいじやん。

結局、本当に一緒にいたいやつと居たいって。

それだけじやないの？」

秋司 「・・・」

(時間経過入れるかも)

踏太 「・・・2人いいよね。

なんか今日幸せな気持ちになつたんだ」

秋 司 「？」

踏 太 「2人は別れずにずっと一緒にいてね。

それで僕に、愛とかって、ある事、証明し続けてね」

那乃助 「なんだよ急に・・・」

ピピピと携帯電話のアラームが鳴る。

秋 司 「あ、終電だ」

那乃助 「そつか。悪りい。またゆっくり会おうよ」「

踏 太 「うん。ごめん。なんか暗くしちやつて」

那乃助 「いいよ。気にするなよ。じやな」

と言つてる間に、秋司が会計を済ませている。

那乃助と秋司、店の出口に歩いていく。

踏太の後ろ姿を見る秋司。

那乃助と相談。

立ち止まり、踏太へ

秋 司 「踏太くん。家来ない」

振り向く踏太。

修の部屋（夜）

ベッドに横になつてゐる奈津子。

奈津子の腰に湿布を貼る修。

めくれていたシャツの裾を戻す。

奈津子 「ああ。ありがとう」

修 「効くの？」

奈津子 「まあ、気休めみたいなもんだけど」

修、寝室から出る。戸を閉めようとする。

奈津子 「あ、開けておいて。まだ寝ないから」

修 「・・・」

修、携帯電話を取り出し、見る。

踏太からの連絡はない。

× × ×

修、仕事の書類を取り出し、見る。
テーブルで作業している。

お湯が沸き、コップに注ぐ。

イスに座る前に寝室を覗く。

奈津子「起きてるよ」

修 「ああ」

奈津子「まだ寝ないの？」

修 「うん。もうちょい」

奈津子「仕事？」

修 「・・・うん」

奈津子「仕事楽しい？」

修 「まあ。・・・母さんは？」

奈津子「お母さん？ねー。楽しいけどしんどいよ。

いつでも辞めたいって思ってるよ」

修 「辞めてやりたい事あるの？」

奈津子「別にないけど」

修 「・・・」

奈津子「仕事樂しいって幸せな事だよ」

修 「そうだね」

修の部屋　（朝）

ベッドの布団を畳んで、片付けている奈津子。

奈津子「結婚つて人生で大きな事だもんね。」

「そういう場面に出会う仕事つて。良い仕事だよね」

修「まあね」

奈津子「人の事もいいけど。修はどうなの？」

修「なに？」

奈津子「結婚。やつぱりしないの？」

修「しないよ」

奈津子「そんな、決め付けなくともいいのに」

修「・・・」

奈津子「まあ、お母さん、修がどんな生き方しても良いけど。

歳とつてから一人は辛いよ。どんな人でも

一緒に生きてくれる人いたら、お母さん安心だわ」

寝室をチラリ見る修。

帰る様子。

(編集つながり的には

前のシーンの修の見ているものとしてつなげる)
窓から外を見る修。天気晴れ。

奈津子リビングに戻つてくる。

コートを着ている。

修 「今日、なんか暑そっだから、

そんなに着なくて大丈夫だと思うよ」

奈津子 「そう? こないだも異常に暑い日あつたね」

修 「うん」

奈津子、とりあえずマフラーをカバンにしまう。

修 「コートもいらないと思うよ」

奈津子 「そう? でもお腹出てるの隠れるでしょ?」

修 「出でないよ。ジャケットだけでいいじゃん」

奈津子 「そっか」

と言つて、コートを脱ぐ。

奈津子 「あ、そうだ」

と言つて、カバンから薬を取り出し、
水をコップに注ぐ。

修 「それ何?」

奈津子 「血圧の薬」

修 「血圧高かつたつけ?」

奈津子 「前に急に上がつた事あつてね。」

血圧の薬は一回飲み始めたら

また上がつた時に怖いから、

ずっと飲んでおかないといけないの」

薬を飲む。薬の入つていた袋をカバンにしまう。

修、後ろから肩に手を置いて軽く握る。

奈津子 「・・・どうしたの」

修 「仕事、嫌だつたら辞めれば。お金困る訳じやないだろ」

奈津子 「辞めてどうするの。する事なくて家いてたら、

すぐ、もうろくしちやうよ」

修 「・・・」

奈津子 「今回、修のところ来て、リフレッシュ出来たから。

大丈夫。・・・ありがとうね」

修
「うん」

と言って、手を下ろす。

駅前の道 (朝)

修と奈津子、お別れ。

奈津子 「またね」

と言つて手を振り、駅に向かって歩いていく。

修、無言で手を上げ応え、見えなくなるまで見送る。

結婚式場 (昼)

修が式を挙げる予定の2人を
案内している。

51 美奈の会社 オフィス (昼)

50 結婚式場 (昼)

49 駅前の道 (朝)

奈津子 「またね」

と言つて手を振り、駅に向かって歩いていく。

修、無言で手を上げ応え、見えなくなるまで見送る。

結婚式場 (昼)

修が式を挙げる予定の2人を
案内している。

51 美奈の会社 オフィス (昼)

お昼休憩。

乾、書類を美奈のところに持つてくる。

乾 「里中さん」

美奈 「はい」

乾 「休憩中すみません。これ目通しといて
もらえますか?」

美奈 「はい。分かりました」

桜井が漫画を読んでいる

桜井 「ふむふむ。へー。なるほどねえ」

美奈、桜井の声に気が散る。

桜井 「えーあらま。そつかあ。へー」

といいながら漫画を読んでいる。

ページをめくる度に反応がデカい。

美奈 「あの、桜井さん」

桜井 「わー。そうなるか? ふむふむ」

美奈 「ちよつと。桜井さん」

桜井「・・・はい。なんですか？」

美奈「気が散る。声出ちやうなら休憩室行つてください」

桜井「すみません。怒られちゃった」

と言つて丸くなる。大橋に話しかける。

桜井「ねー、まだですかー？」

大橋「オツケイ。行こか。貞治係長も行きます？」

大橋「あ、うん。混ぜて」

桜井「私タイカレー食べたいですー」

と言いながら3人並んでオフィスを出ていく。

美奈もひと段落つき、カバンから、駅前で買ってきたパンを取り出す。

ふと、結衣を見る。

お弁当を食べながらパソコンに向かっている。
食べる時は手で口元を隠して、

モグモグしている時にパソコンに向かい作業をしている。

美奈、頑張ってるわねという風に見ていると、

結衣気付き、頑張ります！と言つたポーズ。

美奈、パンを取り出し、食べる。クロワッサン。

サクサクのデニッシュ部分のカケラが

ポロリと落ちる。

ブーンと美奈の携帯電話がバイブルーション。

武からのメール。

父親が肺がんで手術する事になつた事。

しばらく実家にいる事が書かれている。

52

美奈の会社 休憩室 (昼)

美奈、武に電話をしている。

ガチャリ。電話に出る武。

武 「もしもし」

美 奈 「もしもし武くん？」

武 「うん。久しぶり」

美 奈 「やっと電波届いたよ」

武 「ごめん。俺の部屋、全然無理で。今、外だから」

美 奈 「そつか」

　　「一通一通。電話が切れる。

　　美奈、かけ直す。プルプルプル、ガチャリ。

美 奈 「もしもししい」

武 「あ、ごめん。電波途切れた」

美 奈 「もう」

武 「なかなか連絡出来なくて、ごめん」

美 奈 「メール見たよ」

武 「うん」

美 奈 「お父さん。大変だね」

武 「うん。肺がんって。舞子さんの事もあるから。心配で」

美 奈 「うん。武くんは大丈夫?」

武 「俺は。大丈夫」

美 奈 「良かった」

武 「手術終わって、退院するまではいてあげたいんだ」

美 奈 「分かってる。いてあげて」

武の実家　いわゆる田舎といった感じの道　（昼）

武 「ありがとう」

美 奈 「私、武くんがお父さんやお母さんを

大事にする人だつてどこも好きだから」

武 「ありがとう。寂しくさせてごめん」

美 奈 「大丈夫。しょっちゅう武くんの部屋行つてるから」

武 「え？ 行つて何してるの？」

美 奈 「行つてー。短歌考えてるの」

武 「そう」

美 奈 「あのね、もうすぐ私、誕生日だよ」

武 「分かってる」

美 奈 「30だよ」

ブープー。電話が切れる。

かけ直そうとするが止める。

短歌。

電話をパタンと閉じる（サイズより）

武、電話をいろいろな方向へ向けて
電話をかけようとしている。

そこに、電話の、電波が立つてない音かぶせる。

「ぶつぶつぶつぶ・・・・ブープープー」

54 修の部屋 (夜)

修、部屋に帰つてくる。

暗い室内。照明をつけるが、踏太はいない。

電話をかけてみる

電話 「おかげになつた電話は、電波の届かない場所にいるか

電源が入つていない為・・・」

パタンと電話を閉じる。

55 陽一の部屋 (夕方)

ピンポンと呼び鈴が鳴る。

陽一 「・・・はい」

がちやりドアを開けると荷物の配達員。

配達員 「お届けものでーす。失礼しまーす」

× × ×

陽一の部屋 いっぱいに段ボール箱の山。

配達員 「じや、これですべてです。ありがとうございましたー」

ペコリ頭を下げる陽一。突然の大量の荷物に驚いている。

56

陽一の部屋 （夜）

陽一、舞子の姉・清美に
電話をかけている。

手には荷物の伝票。ガチャリ。

陽 一 「あ、あの。もしもし」

清美 「もしもし？」

陽 一 「相原です。稻森さんですか？」

清美 「はい」

陽 一 「お姉さん。^{（）}無沙汰してます」

清美 「・・・はい」

陽 一 「あの、今日、先ほど、

荷物が届いたんですけども・・・」

清美 「はい」

陽 一 「・・・あの、これは？」

清美 「舞子の。遺品です」

陽 一 「全部ですか？」

清美 「ええ」

陽 一 「あの、何で急に？」

清美 「今度、私、結婚する事になりました」

一 「あ、ですか。・・・おめでとう^{（）}ございます」

清美「はい。それで、夫と海外に行かなくてはならないんです」

清陽「はあ」

清美「今の家は引き払わないといけなくて」

清陽「そうでしたか」

清美「はい。・・・それで、持つていく訳にはいかないし、私は捨てる気持ちになれないでの。」

陽一さんのところに送らせて頂きました」

一「そうですか・・・」

清美「陽一さんの好きなようになさつてください」

一「・・・分かりました。あの、それで、お骨は？」

清美「・・・」

一「お骨はどうされるんですか？」

清美「あちらに持つていきます」

一「そんな・・・。あの、返して頂けませんか？」

清美「え？」

一「そろそろ舞子をゆくつりさせてあげてください」

清美「陽一さん。陽一さんは、

舞子と過ごしたのは7年ちょっとでしたよね?

私たちは20年以上、

姉妹2人だけで生きてきたんですよ。

まだ整理がつかないんですよ。

自分でもおかしい事、分かつてます」

陽
一「・・・」

× × ×

ゆっくり、パタリと携帯電話を閉じる。

和室を見る。

陽一からの目線。寝転がる舞子。

舞子は畳が好き。和室に良く寝転がっていた。
和室を見つめる陽一。山積みの段ボール。

部屋に美奈、香織、修が訪れる。

美 奈 「おじやましまーす」

リビングに来る3人。

美奈、段ボールの山を見るなり、

美 奈 「うわあ。すごい量だね」

美 陽 一 「うん」

美 陽 「これは一人じや大変だよ」

一 「悪いね」

美 奈 「ううん。 やろう」

美 陽 一 「うん」

香織、修もおなずく。

× × ×

それぞれ段ボールを空け、中の物を出していいる。

香 織 「服は。どうするの？」

陽一 「・・・服はもう・・・」

香織 「分かった」

と、いつて、服を捨て始める。

奈 「これ・・・靴だ。靴もだよね?」

陽一 「うん」

靴を捨て始める。美奈、何か感情がこみ上げてくる。

美奈 「はあ」

香織 「?」

美奈 「ちよつと待つてね」

と立ち上がり。

窓際へ行く。

美奈 「ごめん。結構辛いよ。ふう」

陽一 「無理しなくていいよ」

美奈 「ごめんね」

舞子のものをどんどんと捨てていく香織、陽一、修。

と行つて、また片付けに加わる。

美奈 「よし」

入っていた物が無くなつた段ボールは畳まれる。

積み上がつていた段ボールは
どんどん無くなつていく。

美奈 「こういうのまで残してあつたんだ・・・」

何枚もの半紙。小学生時代の習字の練習。
いくつかおもしろい言葉。微笑ましく見る美奈。
「希望」の文字。花丸がしてある。

陽一 「それも。いいよ」

美奈 「うん」

捨てる。

香織が上に積み上がつてゐる段ボールを
下ろそうとしている。修、気付き、

（香織の赤ちゃんを思つて）

修 「木佐木。変わつて」

香織 「あ、うん」

修 「よ、あ、これ重い」

と言つて、しつかり持ち直し、下に下ろす。

修 「何入ってるんだろう・・・」

段ボールを開ける。アルバムや写真。

香織 「すごい量だね」

美奈も写真の入った段ボールに近づく。

美奈 「舞子、よくみんなを撮つてくれたよね」

一 「自分が写るより、撮る方が好きだったよ」

香織 「あ、お姉さんとのも、あるよ。分けようか」

陽一 「うん」

写真やアルバムを出し、手分けして整理する4人。

美奈 「あ、これ耐寒登山の時のだ・・・」

修 「あ、本当だ。舞子写つてない」

陽一 「舞子が撮つてくれたんだよ」

美奈 「・・・(一緒に撮つた記憶がある)」

束になつた写真をめくる。

美奈と舞子が写つてている写真。

泣いてしまう美奈。

香織 「ここのは全部いるものだから。こっち片付けよう」

美奈「・・・うん」

と言つて、別の箱を開け、中身を出して片付ける。
陽一、写真の整理をする。ふと目にとまる
自分との写真が納められたアルバム。

いろいろな場面の舞子と陽一の写真。

× × ×

お姉さんに送る分の写真をまとめて、
袋に詰めている陽一。和室を見る。

陽一からの目線。

三角座りしている舞子。コロンと横になり、
伸びをして、丸くなる。

段ボールがボツンと和室に一つある。

美奈、香織、修、部屋に戻つてくる。

陽一 「大丈夫だつた？」

修 「あ、うん。これ」

遺品整理会社からの手紙と領収書を陽一に渡す。

「大きなもの無いから、少しずつお焼き上げしてくれるって」

修

一 「そう。良かつた」

段ボールが無くなつた部屋を見る4人。

陽一 「今日は、本当にありがとう」

うなづく、3人。

香織 「相原くん、舞子のお骨は・・・」

陽一 「お姉さんが持つてる」

香織 「どうするの?」

陽一 「持つていくらしい。いい加減戻して欲しいんだけど。

今、話し合つてる

香織 「そう・・・」

58
帰り道 (夕方)

修、香織、美奈、歩いている。
美奈、立ち止まり、

落ちてくる枯葉や風を感じている。

携帯電話がバイブルーション。

ブーン鳴る。

メールを見る美奈。

武 N A 「父さんの手術終わりました 武」

(N A か画面)

画面を見つめている美奈。

落ち葉は絶えず落ちてくる。

59

香織の家 キッキン (昼)

台所で料理をする香織。早めの準備。

ピーマンの肉詰め。香織の表情寄り。

野菜を切っている音。周りの材料など料理準備の画。

香織の表情が曇る。腹部に鈍痛。

が、急に激痛に変わる。手元の寄り。

ピーマンがパカリ半分に切れたところで

あまりの痛さに倒れ込む。

美奈の会社
オフィイス
(朝)

美奈、出社ってきて、準備。

コーヒーを自分で入れて飲んだり？

桜井も出社してくる。

卷之三

美奈「おはよう」

桜井、席に着くとカードが置いてある。

桜井
ん?
—

と座つてカードを読み始める。

桜井 ふんふんへ

そこに結衣が出社してくる。

橋や大橋、が結衣に駆け寄る。

橘「おめでとうー」

大橋「おめでとうー」

結衣「ありがとうございます」

キヨトンとした表情でそれを見ている美奈。

美奈「何?なんかあつたの?」

桜井「え、ああ。結衣ちゃん結婚するみたいですよ」

美奈「え?あ、うそ?」

桜井「ほら、これ」

とメッセージカードを見せる。

美奈、カードを見て、驚く。

桜井「おめでたですよ。おめでた婚。ふふふ」

と言つて、桜井も結衣の近くに行く。

美奈「・・・」

結衣の周りに社員が囲んでいる。

式の事や、相手の事などを聞いている。

美奈に気付き、すみませんと言つて、

輪から外れ、美奈の席まで来る。

衣「里中さん。おはようございます」

美奈「あ、はい。おはよう」

結衣「あの、これ」

とメッセージカードを渡す。

結衣「里中さんには直接渡したくて。

私、結婚するので、今月いっぱい退職します。

今までありがとうございました」

61

美奈の会社 給湯室（昼）

美奈、メッセージカードを読んでいる。

読み終わり、ポケットにしまうが、

もう一度取り出し、くしやくしやに丸めてしまう。

ゴミ箱に捨てようとするが、さすがにためらい、

またポケットにしまう。

62

修の部屋（昼）

（修、何か用事をしている。要相談）

ガチャヤリ。踏太が戻つてくる。

修 「踏太、どこいつてたの？」

踏太 「・・・」

修 「おかいり。心配したよ」

と言つて後から抱きしめる。

が、ほどいて、立ち上がる。

修 「・・・」

踏太 「修。別れたい」

修 「・・・なんで？」

踏太 「・・・」

修 「何か気に入らない事、あつた？」

踏太 「・・・」

修 「踏太。黙つてちや分からぬだろ」

踏太 「・・・修の事、好きか分からぬから」

修 「え？ なんで？」

踏太 「好きだから一緒にいたいのか、ただ寂しいから

一緒にいたいのか。分からぬから」

修 「・・・」

踏 太 「だから別れたい」

修 「なんだよそれ」

踏 太 「ごめん」

修、踏太に近づき

修 「寂しいから一緒にいたい、でもいいから。別れたくないよ」

踏 太 「・・・」

修 「なあ」

踏 太 「寂しいから一緒にいたいっていうのは、

誰でもいいって事なんだよ？」

修 「・・・」

踏 太 「修は優しくて素敵だよ。

お母さんに愛されて育ったんだよ。僕は違うから。

愛情とか分からぬから。

誰でもいいから一緒にいたいだけ。

修が僕に優しくしてくれるから辛いよ」

修 「辛いって。なんでだよ・・。

好きだから優しくするんだろ。当たり前じやん」

踏 太 「ずっと一緒にいたいって風にされると

重いんだよ。

正直。僕そんな覚悟ないよ」

修 「・・・」

踏 太 「ごめん」

修 「・・・」

踏太、奥の部屋に入り、

まとまっている荷物を持つてくる。

ポケットから部屋の鍵を取り出し、テーブルに置く。
黙つて見つめている修。靴を履いて部屋を出る踏太。

踏 太 「ありがとう。・・・バイバイ」

修 「・・・（うん）」

パタン扉閉まる。

踏太の足音遠ざかっていく。玄関前に立ち尽くし、
その音をじっと聞いている修。

足音が聞こえなくなる。

修
「はあ・・・」

ため息。

63
武の部屋
(夜)

帰つてくる美奈。ソファに座る。

カバンの中からくしゃくしゃになつた

結衣からのメッセージを取り出し、手のひらの上で

持つてているのを眺める。

短歌

64
香織の実家
家の前の道
(夕方)

道の向こうから、手をつないだ親子

久子と智哉が歩いてくる。

智哉、遠くを見るポーズ。

智哉「あ」

と、香織に気付き駆け寄る。

久子も香織に気付く。

久子「香織ちゃん」

65

香織の実家 リビング (夕方)

(久子に、帰つてきたら手を洗うと言わされて)

智哉、洗面所に走つていく。

久子「偶然?」

香織「お店行つたらお休みだつたから。

帰つてゐのかなつて思つて」

久子「そなんだ。電話くれれば良かつたのに」

香織「そうだね。出掛けの?」

久子「ううん。明日もいるよ。なんで?」

香織「ううん。お母さんは?」

久子「もうすぐ帰つてくるよ。買い物してゐつて」

香織「そう」

久子、買い物の袋など置いて、一息つく。

久子「さてと……」

香織「何か手伝う？」

久子「ううん。ありがとう。もう出来てるから」

香織「そつか」

久子「……何か話したい事あつたの？」

香織「……うん」

久子「治療？辛くなつた？」

香織「ううん。赤ちゃん……出来たんだけどね」

久子「え、本当に？良かつたじやないの？」

久子の声にかぶるように、玄関ドアの開く音。
母・幹子が帰つてくる。それに気付き焦る香織。

香織「違うの。出来たんだけど……」

香織の表情を見て察する久子。

久子「……」

幹子「なにー。香織来てるのー？」

香織「うーん」

幹子靴を脱いであがる。

幹子「ただいまあ。はあ疲れた」

トリビングに入つてく。

幹子「めずらしい。来てたの」

香織「うん。おかげり」

幹子「ただいまー」と

心細いながら手に持つた

スーパーのビニール袋をテーブルに置く。

幹子「はあ疲れた」

ドカツとイスに座る。

智哉がリビングに来る。

幹子すかや

幹子「Good evening Tomoya.」

智哉「Good evening grandmother.」

幹子「How are you?」

智哉「Fine thank you. And you?」

幹子「I'm fine too.」

4人で食事。テーブルの上には久子の作った夕飯と幹子が買ってきたお惣菜。

幹子はワインを飲みながらの食事。

幹子「いただきます」

と手を合わせる。他の3人もいただきますと言つて手を合わせる。

智哉、久子にお皿とお箸を渡す。

(久子、智哉には惣菜より、

自分の作つた料理を食べさせる。

どんな料理が良いのかは相談。

惣菜との兼ね合いもありそう)

幹子「それで、最近どうなの?」

香織、私に話しかけてるの?

という感じに幹子を見ると、

自分に話しかけているようなので返事をする。

香織 「なに」

香子 「お義母さんよ」

香織 「うん。・・・まあ」

幹子 「まあ何?」

香織 「最近部屋こないから。顔合わせてない」

幹子 「ふーん。意地張つてないでもう帰つてきたらどうなの?」

香織 「・・・」

幹子 「よく我慢して暮らせるわよね。

お母さんならごめんだわね。

あんな人とひとつ屋根の下なんて。

考えただけでストレス溜まるわね。

真作さんも真作さんよね」

久子 「お母さん」

幹子 「何よ。あんただつて、あそこの家の人たち

好きになれないって言つてたじやないよ」

香織、チラリと久子を見る。

久子「お母さんがそうやつて煽つてどうするのよ」
幹子「だつてそうでしようよ。おかしいじやないの。
思い出すだけで腹が立つわよ。

ねえ、あんたにはハツキリ言わなかつたけど、
あの時ねえ、姉妹そろつて不妊なのは

家系の問題なんですか、つて言つてきたのよ?
そんなのある訳ないじやないの。ばかばかしい」

幹香
織「…」
幹子「うちをばかにしてるのよ」
久子「…」
幹子「あの人がまだ何か言つてくるようなら、
さつきと離婚しなさい」
久子「ちよつと」
幹子「今日だつて、あつち嫌で息抜きに帰つてきたんでしょ?」
幹香織「…違う」
幹子「じやなに?」
香織「…」

子「変に子供が出来る前にちゃんと考えなさいよ」

久子「ちよつと。そんな言い方はないわよ。ひどいわよ」

智哉、場の雰囲気に目をパチクリさせる。

そそくさと食事を終える。

智哉「どうぞさまでした。宿題しーよおつと」

と言つて、席を立つ。

久子「あ、智。ごめんね。後でジュース持つていくわね」

智哉、2階に上がる。

3人、沈黙のまま食事続ける。

香織の実家 2階の部屋 (夜)

久子「相変わらずでしょ」

香織「うん」

久子「何週だったの?」

香織「6週」

久子「そつか」

久子「真作くんに話し出来てないの？」

香織「うん」

久子「怖い？」

香織「うん」

久子「そつか。不安だつたね。でも、大丈夫。

お姉ちゃんは味方だから。ね。信じて」

香織「うん」

久子「それに、真作くんは、

ちゃんと香織ちゃんの事

守ってくれるよ」

香織「・・・うう」

声を押し殺して泣く香織。

久子「我慢しなくていいよ」

香織、我慢出来ず泣く。

久子、香織の肩や頭を撫でて、慰める。

香織、キツチンにいる。

真作が帰つてくる。

真作「ただいま」

香織「おかえりなさい」

真作「何時頃戻つたの？」

香織「お昼には」

真作「そう。お義母さん、お変わりなく？」

香織「ええ」

真作、香織の方を見る。表情がうかない。

真作「どうしたの？赤ちゃんの事、報告してきたんだろ？」

香織「・・・」

真作「喜んでくれなかつたの？」

香織、話そようと決意する。

ケーキを買って、帰つてくる。

食べる準備。ろうそくが出てくる。

美奈「・・・」

ろうそくを捨てる。

美奈「いただきまーす」

と言つてケーキを食べはじめる。
やけ食いの様相。

短歌

電話が鳴る。武から。

武 「もしもし。美奈？」

美奈「うん。これ家の番号？」

武 「うん」

美奈「じや電波気にせず話せるね」

武 「うん。・・・お誕生日おめでとう」

美奈「ありがとう。今ケーキ食べててるよ」

武 「部屋？」

美奈「うん」

武 「そう・・・ごめんな」

美 奈 「お父さん、どう?」

武 「うん。なんとか。食欲あるしね」

美 奈 「そつか。ひと安心?」

武 「どうだろう・・・。手術で完全に取れても、

再発が結構あるみたいで。

経過観察が必要みたい」

美 奈 「なんだ。武くん、前から

実家に戻りたいって言つてたし。

ちようどいい機会じやないかな」

武 「俺つて変かな?」

美 奈 「え?」

武 「家族にベツタリしすぎるのかな。一人っ子だし」

美 奈 「関係ないと思うよ。親の事思えるつて素敵だよ」

武 「そうかな」

美 奈 「うん。武くんがいてくれたら、ご両親も安心だと思うよ」

武 「うん・・・。せつかくの誕生日に

一緒に居てあげられなくて、ごめん」

美奈 「大丈夫。仕事するよ」

武 「せつかくだから、素敵な一日過ごして欲しい。
そうなるように願つとく」

美奈 「うん」

武 「じゃあ、また病院行かなきやいけないから」

美奈 「うん。またね」

武 「うん」

電話を切る。

ケーキ食べる美奈。

短歌（電波が届いても、結局大事な事を
ひとつも話し合えない）

電話が鳴る。

70

病院 廊下 （昼）

美奈と香織が慌てた様子でやってくる。

陽一の病室に入る。

(電話の音、ここまでひっぱても良いかも)

71 病院 陽一の病室 (昼)

美奈と香織が入ってくる。すでに到着している修がベッドの横にいる。陽一は眠っている。

美奈 「陽一くん・・・。修くん？」

修 「大丈夫。今、眠ってる」

美奈と香織、陽一を見つめる。

72 道 (昼)

美奈、香織、修、歩いている。

修 「働きすぎの過労と。舞子のお骨の事もあつたのかな。

免疫力が落ちてるって」

香織 「お骨、なんとかしてあげたいな・・・」

修 「うん」

美 奈 「どれくらいいるの？」

修 「うーん。しばらくは検査入院だろうね」

美 奈 「そつか。退院したら、またみんなで

パーティーしたいな」

修 「そうだね」

香織 もうなずく。

美 奈 「もちろん踏太くんも。ね」

修 「踏太は駄目だよ。別れたから」

美 奈 「？・・・そうなんだ。・・・仲良さそうだったのに」

修 「いろいろあるよ。僕らには確実なものがないからさ。
結婚とか、子供が出来るとか。気持ち以外に

繫ぎとめておいてくれるもの、無いしね」

美 奈 「・・・」

香織 「確実なものなんて、どこにもないよ。

結婚してたって。どうなるかなんて、分からぬいし」

美 奈 「どうしたの？」

香織「赤ちゃん、駄目になっちゃったんだ」

修
「・・・」

香織「ずっと夫の親と関係良くなくてさ。」

赤ちゃん出来て、変わってきたんだけど。
駄目になっちゃってさ。

私も、本当に赤ちゃんが欲しいのか
分からなくなっちゃってさ・・・」

2人より少し先を歩く香織。

香織「何がいいとか、どうしたら幸せになれるかなんてさ
確実なものないよ」

香織、歩いていってしまう。

73

香織の家 リビング (夕方)

真作ソファに座つて、考え方をしている。

香織が買い物袋を持って帰つてくる。

香織「・・・帰つてたんだ」

真作「ああ」

香織台所に向かう。

真作「作るのか？」

香織「うん」

香織、静かに夕飯の準備を始める。

香織「何だと思う？」

真作「ん？」

真作、しばらく考えた後

真作「ハンバーグじやないかな」

香織、少し驚き嬉しいような複雑な表情。

作り始める。

× × ×

テーブルの上にハンバーグ、サラダ、ライス。
2人とも食べている。

真作、少し食べてはため息をついている。

真作の方を見ず、うつむきながら食べる香織。

陽一の病室（昼）

病室内に陽一のお見舞いで

修、美奈、香織がそろっている。

修 「会社の人来た？」

陽一 「いや」

修 「冷たいな」

陽一 「そんなもんだよ」

そこに舞子の姉・清美がやつてくる。

舞子の遺骨箱と、遺影を携えて。

陽一 「お姉さん・・・」

清美 「陽一さん。私・・・」

陽一 「・・・」

清美 「・・・間違つていました。

私一人が悲しい訳じやないんですよね。

舞子をずっと一人じめしてしまって……。

本当にごめんなさい。

もう舞子は、ゆっくりさせてあげなきや
いけないですよね……」

と言って、陽一のベッドにあるテーブルに
遺骨箱を置く。ハラリと風呂敷を開けると、
笑顔の舞子の遺影。

陽一は思わず涙がこぼれてしまう。

75

武の実家
(夜)

座つている民雄。恵子、武もいる。

恵子「そろそろ横になつた方がいいんじやない？」

民雄「ああ。うん。・・・やつぱり家はいいな」

と言いながら立ち上がり立つとする。

恵子「武」

武 「あ、うん」

民雄に近づき、立ち上がる介助をする。

76 武の部屋 郵便受け前 (夜)

美奈、カバンの中から

買つてきたばかりの封筒を取り出し、
封を開けて、ひとつだけ出す。

同じく、カバンから

武の部屋の鍵を取り出し、封筒の中に入れ、
ポストに入れる。その場を去る美奈。

77 道 武の部屋から美奈の部屋までの道途中 (夜)

美奈歩いている。

78 美奈の部屋 玄関前 (夜)

帰宅してくる美奈。

カバンの中から、部屋の鍵を出そうと探す。
鍵がない。

美奈「あれ？・・・」

ゴソゴソ探してもないので、
その場でしゃがみ込み、カバンの中身を
ひとつずつ出して、鍵を探す。が、鍵はない。

美奈「あれえ・・・」

道 武の部屋から美奈の部屋までの道途中 （夜）

79

美奈、歩きながら鍵が落ちていなか探している。

美奈「無いなあ・・・ふわあ」

眠くて頻繁にあくびをする。
しばらく歩いて立ち止まる。

もう一度、最後に鍵をどうしたのか考えてみる。

気付くと、以前ひつたくりにあつた
場所に来てしまつていた。

美奈「……」

そそくさとその場を後にし、
下を見て探しながら歩いていると

後ろから通行人がやつてくる。人の気配に驚く美奈。

美奈「キヤア！」

通行人「わー！なんですか！？」

美奈「いえ、あ、すみません」

通行人「びっくりした……」

と通行人立ち去る。

美奈「すみません……」

武の部屋 郵便受け前 (夜)

結局、武の部屋まで
引き返す事になつてしまつた美奈。

とても疲れた様子で、郵便受けの周りを探す。

美奈 「はあ・・・。無い。どこいったんだろう・・・」

としゃがみこむ。

もう疲れているし、

ずっと外をウロウロする訳にいかないので、
郵便受けに手を突っ込み、鍵を取ろうとする。

美奈 「うう！」

81

武の部屋
(夜)

ガチャンと鍵を開けて、室内に入つてくる美奈。

美奈 「ふわあ・・・。疲れた」

携帯電話を取り出しながら、ベッドに横になる。
携帯電話の時計を見る。夜中の1時。

美奈 「1時じやん・・・。はあ・・・。(短歌)」

と言いながらいつものごとく

メールに短歌を打ち込む。そのまま寝てしまう。

誤つてメールを送信してしまう。

82

武の部屋（朝）

寝ている美奈。9時49分。ハツと起きる。

美奈「は！何時？・・・」

と言いながら電話を探す美奈。

枕の下に埋まっている。見つけて手に取る。

電話の、メール送信済みの画面。

美奈「ん？！」

電話を確認すると、

下書きしていた短歌メールを

送信してしまっている。

美奈「えー！！」

ベッドから飛びおりる。

美奈「しかも遅刻だし！」

83 武の部屋 アパートの前 (朝)

勢いよく階段を下りる美奈。

美奈 「じゅしよう! じゅしよう!」

と何度もつぶやいている。

84 道 武のアパート近く (朝)

広い通りに美奈が出てくる。

美奈 「どうしようどうしよう・・・」

道の向こうの遠くから走ってくる武。

美奈 「ん?」

誰? と思いながら武の姿を見つめる。

美奈 「あれ・・・」

武、美奈のところにやってきて、抱きしめる。

武 「はあはあはあ」

走ってきて、息切れしている。

美奈「・・・」

少しの間。

美奈は、別れようとも思つていただけに複雑な気持ちがある。

武、深呼吸をして息を整えて、

武 「何回も口に出せずにいた気持ち今こそ君に伝えてみせる」と、美奈の耳元にささやく。

そして、抱きしめていた体を離す。

武 「美奈・・・結婚してください」

美奈「え、あ」

見つめ合う2人。

美奈「はい」

キヨトンとした様子で答える美奈。

武 「そう。やつた！やつたー！よかつた！」

美奈をもう一度抱きしめる。

笑顔になる2人。

			85 1年の後
	86 靈園 舞子のお墓の前 (昼)	87 靈園近くの道 (昼)	87 テロップ
陽一 修 陽一	喪服姿の陽一、修、香織がお墓の前にいる。 手を合わせている。	陽一、修、香織歩いている。 「陽一も？・・・そう思えた？」 「一年。また一年経つたら寂しさなんて 、少しづつ減つてくる。薄情だね」	

香織「美奈来れなかつたね」

陽一、ポケットから絵葉書を取り出す。

お腹の大きな美奈、隣に武。

2人とも笑顔の写真。

(お腹の中には大切なものを詰めたい)

陽一「もうすぐ生まれるらしいからさ」

香織「そつかあ」

と絵葉書を陽一から取り、

美奈の幸せそうな顔をじっくりみつめる。修も見る。

香織「はい」

と言って、絵葉書を陽一に返す。

修、香織の指を見る。結婚指輪が外されている。

(例えば、葉書の写真じやない面を

裏返して読んでる時に指輪がない事を気付く)

下の街を見渡した後、おもむろに叫ぶ陽一。

一「舞子。俺も幸せになるぞ」

修、香織、突然の事で驚く。

陽一の後ろ姿を見つめる。

一 「自分なりの幸せ探すぞ」

とつぶやき、歩き出す。

香織 「私もー！」

と同じく叫ぶ。

2人を見つめ、うなずく修。

3人歩いていく。

おわり